

## 新しい時代における教員・保育者養成学部の高度化のために

寺崎 昌男

## A Keynote Speech for the Development of the Faculties of Nursery &amp; Primary School Teacher Training Program in a New Age

TERASAKI Masao

## 要 約

本稿は、現代教育学部第1回FD講演会として、2016年7月13日、東京大学・立教大学・桜美林大学名誉教授、元中部大学大学教育センター客員教授の寺崎昌男先生に話していただいた記録である。

## 教育学と大学史への道

皆さんこんにちは、寺崎です。ご紹介いただきましたようなキャリアを持っておりますけれども、こんなに大勢の方々の前でこんなに詳しく経歴を話していただきましたのは生まれて初めてです。

小熊先生は昔からさぼるということを知らない学生でいらっしゃいました。今も全く同じように経歴を一から十まで話してくださったのですが、ふりかえってみれば私も、どこの大学でもあまりさぼらないでやってきたということなんだろうと、聞きながら思っていました。これまでにいろいろな仕事をしてきましたが、大まかに言いますと教師経験が最初であって、今は教育史の研究に移って来たということになります。

教師経験の最初は、子ども会でした。教会で聞かれていた子ども会の手伝いをするというのが私の高Ⅱの時の最初の経験でした。やがてその子ども会は、毎晩集まるように盛んになり、それを一生懸命やっているうちに、東大に入ったらそこでぜひ教育学をやろうと思うようになりました。

その当時、教育学部というのは東大の中で駒場にある教養学部と並んで戦後できた、新しい学部でし

た。学内では、見下げられていたと言っていたでしょう。「あそこは、できたばかりの学部で、本当は東大になくてもいいんだ、よその教育大学にあっていい学部なんだ」というのが他学部の先生が目だというのは、あとでわかったことでした。

ところで、教育学をやりたいと思ったのはどうしてかということ、子どもたちとの経験があったからです。「なんとかして子どもたちが毎晩集まってくれるようにしたい。そのためにはどうしたらよいか。うまく合唱ができるようにする、ゲームと一緒に楽しむ、お話をよろこんで聞いてくれる、そういうことができることを目指して指導するにはどうしたらよいか。大学にはそういうことを教えてくれる学部はないだろうか」。高Ⅲのころ毎日そういうように思っていました。すると、ぜひトライしようと思っていた東大に教育学部があるということが分かったんです。「あ、これだ」と思いました。幸運にも首尾よく合格し、3年生になった時に教育学部に進学しました。これが私における教育学への最初の接触でした。そのあと、いつの間にか教育の歴史を勉強するようになりました。

次の曲がり角は、教育の歴史を勉強していく中で、「ひとつ、大学のことをやりたい」と思うように決

めたことでした。自分が今いる大学は、どうやってできたのか、それが疑問になってきたのです。

どうして日本に国立大学というものがあるのか。誰がつくったのか。そこにいる学生たちは勉強していればいいのだが、若い者がただただ勉強していればいいという場所がなぜつくられているのか。そういうことをいつの間にか考えるようになったのです。どうしてそうなったかを詳しくお話しすると長くなるので、ごく手短かに言うと、九州の呉服店だった実家が倒産しかかっていたのです。休学して店員代わりを2年間やりました。その後やっと大学へ戻ったんですけれども、働いているうちに思ったんですね、「自分は、どうして勉強さえしていればよかったんだろう」と。

その結果、卒業論文と修士論文、博士論文というように大学教育のことを続けて勉強しました。その後、生まれて初めて書いたのがこの本で、『大学教育』という題がついています。1969年に出たのですけれども、それまでは大学教育という題の本は1冊もなかったんです。大冒険のつもりでこの題をつけました。ご一緒に書いておられるのは私の指導教授だった海後宗臣<sup>かいご ときおみ</sup>という先生です。

「大学教育」というのは、冒険的な題でした。実はタブーだったのです。大学における教育はどうあったらよいかなんて考えることはとんでもないことだと思われていたのです。そんなことは調査したり研究したりできない「ひそかな仕事」だと、みんな思っていた時代でした。その中で出た本ですから、私は特になつかしく感じる著作です。大学の歴史研究をやっていく中で、私は次第に大学教育のありかたや改革の問題についても研究するようになりました。

## 大学と教員養成

さて、教員養成学部とは何か、その特質は何かという今日のテーマに移りたいと思います。

中部大学を考えてみましょう。昔は工学部が中心だった三浦学園が基盤でした。それが広がってきていろいろな学部が新しくできてきました。今でも工学系は比重が高いようではありますが、人文学部もあり、そして現代教育学部もあるわけです。どうして

こういう総合学園の中に教育学部ができたのか。

それはさっき言ったようになぜ教育学部などというのが東大にあるのかと言われたのと同じ問いです。東大の場合は、戦後の教育改革のためにできたのでした。また、東大に限らず、全国の大学に学芸学部や教育学部ができたのですが、それをつくるときの原則は、2つだけでした。1つの原則は、「教員養成は大学で行う」ということです。2つ目は、「教員は大学の中に教育の課程を置いたところから出すことができる。」というものでした。この2つの原則を教育界のリーダーたちがパッと決めたのでした。

今見れば2つともなんでもない原則のようで、「それがどうしたの」と言いたくなるでしょうけれども、当時としては思い切った大原則でした。どうしてかと言いますと、この裏には師範学校というのを廃止しますよ、という考え方があったからです。師範学校というのは、明治時代以来小学校教員だけを養成していた学校です。これを廃止します、という考え方があって、その上で上記の2原則が確立されていったことになります。

東大は、戦後の教育改革から生まれた問題を正面から引きうけないわけには行きませんでした。なぜかという、義務教育は戦時中まで6年でしたがそれが小学校6年プラス新制中学校3年の計9年になりました。それを担う先生たちはばう大な数になる。その先生たちを養成するには全国の大学が働かななくてはならない。その養成に当たる大学の教授たちは、東大のようなところが育てざるを得ない。そういうわけで、教育についてアカデミックに考えて、新しい教員養成に当たる人たちを東大から送り出すんだ、そのためには東大に学部が必要なんだという理由から、東大教育学部はできたわけです。

中部大学に教育学部ができたのはずっとのちのことですが、中部大学は先ず教職課程を置き、それを発展させて現代教育学部に発展させられたわけです。今やその現代教育学部は、中部地域の教育を支える一つの力になっています。

一つひとつの教育学部はいろいろな背景のもとにできたのですけれども、全体としてはどういう特徴を持っているのか。私どもは、それを調べてみました。そうしますと、1つは目標がはっきりしているという特徴を持っています。これはよその学部と違

います。教員免許状取得という資格と直結しているのです。この点では医学部とよく似ています。医学部の場合、卒業しただけでは資格になりませんが、医師国家試験への受験の資格が準備されています。

2番目の大きい特徴として、専門教育を展開していく場合の重要な局面に多数の人間が関わっているということがあります。これはちょっとほかと違う点ですね。

例えば工学部の卒業生たちが接する先というのは、おそらく、工場なら工場の仲間たちでしょう。課長とか主任とかそういう方たち、それから、先輩のエンジニアたち接するでしょうね。医学部はどうか、これは、非常に教育学部と似ています。例えば勤務先の病院の医院長とか、医局の先輩、看護師や薬局の人たち、もちろん患者やその家族、そういう方たちと接します。

他方、教育の方はどうか、これはさらに幅が広いわけです。まずは子どもたち、すなわち幼児・児童生徒たちですね。狭く見れば、授業を担当する児童・生徒や園児たちだけですが、もうちょっと広く見ると学年の子どもたち全部、あるいはもっと広く言えば全校児童生徒たち、そしてその保護者たちと接することになります。もう一つは同僚の先生たち、主任、副校長、校長などの管理者たちですがさらにももちろん接します。それから最後は教育委員会とか、教育長とか指導主事とか、そういう人たちとも接することがあります。

こうした広い人間関係の中で実習を行うというのは、他の学部の卒業生には余りないのではないのでしょうか。専門職者としての実践の局面で外の世界のたくさんの人たちと接する。これが教育実習の特徴であると同時に、学校教育活動の特徴でもあります。

このことは教育学部に特別な任務を負わせています。学生諸君には、こういう複雑な人間関係の中で将来働く者として、それに備えることを含んだ勉強をしてもらうことが大切です。学生諸君自身の側も「自分は一人で勉強しているわけではない、人との間で勉強しているのだ」という構えを大学生活の面に持ち続けてほしいと思います。

私が東大にいたころにはほとんど感じたことのなかった、立教に戻ってきてから教職課程の主任を

やってわかったことですが、「この課程はよそに対して立教の中のどの学部よりも開かれている、そういう課程なんだ」ということでした。ということは、どの学部の学生に対しても、人間を相手に、相手の成長のために、そして相手と共に学ぶという心構えをもって勉強する体験を与えることが、教職課程教員の大事な使命なのだという事に気付いたのです。

余談になりますが立教へ戻ってきて、特に実習に関していろいろ事件に出会いました。私は15年ほど東大にいて、それから立教に戻ったんですけども、戻ってみたら15年前と比べて起きる事件が違います。実習にせっかく決まっていたのに4日くらい経って、ふっと来なくなったとか、なんの連絡もなく遅刻をしたのに別にお詫びも言いませんとか、そういう例が増えてきたんです。ある市の教頭会の会議に呼び出され、来年から立教からの実習生は断ろうという話でした。いろいろお詫びをして、なんとか許してもらえましたが、起きた事件は、すべて「他者と自分との関係」にかかわる現代の青年たちの意識の変化から生まれたものでした。教職課程の教員は先ずこのことを覚悟した上で大学教育に取り組む必要があることを痛感いたしました。

教職課程というのは、他の学部と違う、外に向かって最も開かれた学部なんだ、他の学部の先生や職員が直面しなくてすむ問題にいつ出会うかも知れない課程なんだということがわかりました。

## 職員との関係

3番目は、それだけに教員と職員の協力が不可欠です。これは非常に強く感じました。

例えば、実習校から電話1本かかったときに、それを受け取るのは我々教員ではありません。職員の方です。その応対一つで、相手の態度が変わるんです。そういうことから始まって、来年度の実習校をどこにするか、挨拶や研究授業をどうするか。そういうよその学部では気にしないでいいことを、四方八方気にしながら課程運営をして行かなくてはなりません。つまり、教員と職員がピタッと気持ちを合わせてないと動いていけない課程なんですね。

私の入っている学会に大学教育学会というのがあ

りまして、そこでの課題研究に「大学人の新しい地平を求めて」というテーマを選んだのですが、実際は教員と職員との協働のあり方を研究しました。その一環としていろいろな学部がどうやってカリキュラムをつくっているか、おのおののプロセスを聞いて回ったのですが、その中で、教職関係だけは特別でした。特に職員の方の教務の複雑さ、それから責任の大きさは並外れていました。もしあの方たちが、教育委員会に教員免許状の交付の申請を学生1人ぶん忘れたとしたら、その学生の4年間の勉強が全部無駄になってしまうわけです。加えて関係教員・職員数人分の努力もゼロになります。教職の一致というのがこれくらい求められる課程はありません。

もう一つ、最近起きている大きな問題はキャリア選択と実習との関係です。これは、教育実習の期間中に企業が面接する、企業がセミナーを開く、こういう時に深刻に現れてきます。

かつて私が戻ってきましたバブル時代の直後に、この問題が起きました。何件もの学生がどうしたらいいでしょうかと相談に来るんです。ちょうど中学校・高等学校の教育実習の最中、企業から面接やセミナーが入って来たらどうすればいいか。「企業も受けます」と言うと教育実習先で非常に邪険に扱われることがあるという噂もありました。また企業の方が本命ならば教育実習は後にして今年の免許取得は諦めるのが正しいのか、いろんな難問が立ちあがって来ました。ここにおられる学生さんたちだっ

て出会うかもしれません。

課程では当時の教職担当のベテランの職員の方に来てもらって話をしてもらいました。それは学生たちにとって大変良かったようです。

結論から言うと、学校に対しては事情を正直に言うこと、その上で、両方ともきちっと力をこめてやること、本命は企業だと思っていなくても、目の前でやっている実習をおろそかにすることは絶対にあってはならない、ということでした。両方をきちんとやった実習生は、どちらかに必ず通っている。これが就職課の人の助言でした。教育実習という、課程修了にとって不可欠の経験には、こういうアドバイスの提供という形での職員の協力も、不可欠なのです。

## 学生諸君のどこを伸ばすか

2番目に申し上げたいのは、教育学関係の学部・課程は、学生諸君のどこを伸ばすかという問題です。

先ほど申しましたように、教員養成は、目標がはっきりしているから、それに沿ったカリキュラムが組まれています。ところが、そのプロセスの中で、どこを伸ばしていくかということが大切なポイントだと思います。

第1に、素直に伸ばしてほしいのは、人間的な存在に対する「愛」です。もともと教育学部の学生の中に人間が嫌いと言う人はあまりいません。特に子どもが好きという人が結構多い。それはかけがえない気持ちとして大事にしてほしいと思います。もちろん、子どもを見る科学的な目を育てて行くことが必要ですがそれだけでなく、子どもという人間に対する興味や関心、言葉を変えて言うと、人間理解と他者理解、他者へのシンパシーを大切にしていってほしいですね。

他者理解の力と言うのは、実は学び方の中で学生の皆さんがともすれば失ってきているものなのです。他者のことなど考えていられない、自分の偏差値を上げることだけがつとめだ、というのが大学入学までの勉強のスタイルでした。その中で、他者を考えるという心性を保ってきたのは、相当難しいことだったろうと思います。それをやってきた学生の皆さんは、それを大事にしてほしいと思います。

これで一つ思い出するのが、他者を理解するのに大事な方法は何かということ「共に生きる」ということなのです。

大阪に帝塚山女学院という学園があります。その国際理解教育研究所の所長をしておられる先生と対談したことがあります。その先生が私にふとおっしゃいました。「先生、高校によって勉強の仕方がすごく違いますね」と。「どういうことですか」と聞きますと、おっしゃたのは次のようなことでした。

「私はいろいろな高校の生徒たちを中国に連れて行って、夏休みの間、中国見学をしていたことがあります。大阪地方の様々なタイプの高校の生徒たちですが、学校によって大いに勉強の仕方が違うんですよ。

例えば、すごい進学有名校の生徒たち、それから

それほど有名ではないけれど、進学を熱心に志しているような学校の高校生たちを連れていくと、きちっと決めたところで質問するのです。工場へ行ったら、『月々生産高はどのくらいですか、中国の第何位くらいですか、労働時間は何時間くらいですか』というようにいろいろ聞いて、それをきちっとノートにとって帰ってきて、ホテルで集まってはお互いに整理してノートに記入する、というようにやっていくんです。

ところが、農業高校の生徒は違ったのです。農村に行き、見学して、昼間は見学したりインタビューしたりしたのですが、帰ってきて、夜に私の部屋を訪ねてきます。そして、『農村で農家の人たちと一緒に2、3日暮させてもらえないでしょうか。一緒に仕事してみたいんです』と言うのです。ああ、聞いてあげるよ、と問い合わせてみると、向こうは、すぐにどうぞと言ってくれたのです。それで、2日か3日、その農業高校の生徒はそこへ行って労働してきました。帰ってきて、『先生、すごくよくわかりました。中国の家庭だからと言って朝から晩まで中華料理を食べているわけではない、ほんとに粗末なものを食べていることもあるんですね。そして、あの人たちがどういう働きをしているか、何に困っているか、どういうときに一番喜んでいるか、おかげでずっとよくわかりました』と言うのです。

工業高校の生徒のときはこういうことがありました。工場へ行って、インタビューをやったとき、『先生、僕ちょっと一人で聞きたいんですけど』と言って別の所へ行って労働者と話をしている。何を聞いているかという、『中国にも暴走族というのはいいますか』と聞いているのです。『暴走族とは何ですか』と聞かれて、『これこれこういうことです、僕も実は2、3年まではまっていたのです、今は辞めているんですけど』と言うと、向こうは大いに喜んで『そういうのなら上海近くなられます』などいろいろな話をしてくれる、と言うのです。前もって決めた問いではなくて、新しいことをパッと聞いて答えを聞いて帰ってくる。そういう話を交わしているうちに、労働時間は何時間かとか、いつが一番働きがいがあるかといったことが自然に分かってくるらしいのです。

私（寺崎）は、「ああ、その起点には、具体的な

中国の人の暮らし、具体的な喜び、これらに対する共感力というのがあるからだ、あるいは育ったからだ』と思いました。非進学有名校の生徒たちであるがゆえに、そういう力が損なわれてない。私たちは多くの知識をきれいに浄化して整理することには馴れています。でも、それは一歩間違えば受験時の勉強になります。戦術的に整理され、要約された勉強がベストということになるわけです。それではだめなのです。これから必要になってくるのはそういう勉強ではありません。

## 現職の中で学ぶこと

もう一つは、現職の中で学ぶ、ということです。これも大事なことです。大学を出てからの学びです。

どうしてかというと、学生諸君に対して、在学中に全部完結するような学びを要求してはいけないということを、私はある機会に学んだからです。在学している学生諸君に全部詰め込もうとしなくていい。なぜかと言えば教師にとっては現職に就いてから学ぶことが実に多いからです。

私は54歳のとき、東大教育学部附属学校の校長になりました。中・高等学校の非常に人数の少ない学校で、1学年120名、中高ですから6学年720人、そういう小規模の学校です。そこで、生徒たちに、私はうんと教えられました。誰に教わったか、不登校の子たちです。

私が校長に就任した1980年代の末は、不登校の児童・生徒が全国で13万人くらい出ていました。今も大体そのくらいです。当時、急カーブで上がっていました。そして、気付いてみると、この小規模校ですら、1学年に2人か3人は不登校者が出ています。その中の一人と私は深く付き合いしました。高校2年の女子生徒でした。その子はほとんど学校に出てこない。たまに出てくると保健室に行っていました。保健室登校と言う言葉がある通りです。そのちょうど隣の部屋が校長室で、そこにいる私と1時間くらい喋って帰る。そういう子がいるかと思えば、わざわざ東大の研究室へ母親と2人で訪ねてきて、話をし、私の似顔絵を描いて帰る、そういう子もいました。

何人かのそういう子と付き合ってたのだったのです

が、それは、本郷にある東大の赤門の中の教育学部で考えていたこととは違う、ということでした。赤門の中で私が考えていたのは、「不登校の子たちというのは、どこかでつまずいたのだ」ということでした。「つまずいた」ということには間違いありません。しかし、つまずいた原因というのは、決して一様ではない。それからもう一つ、不登校になる子は勉強ができない子かと思っていたのですが、そんなことはありません。それぞれに得意技がきちっとありました。ある子は、推理力が極めて抜群で、とても学年の他の子とは比較にならないくらいの人だという子もいました。別の子は、ゲームが大好きで、天才的な腕を持っていました。別の子は文章を書くのが大好きで、欠かさずすばらしい文章の日記を書いていました。そういうような一人一人違う特徴を持っている子たちが、あるとき何かのきっかけで不登校になるのです。

先きほどふれた高校2年の女の子は、本当に毎日のように私の部屋に来ておりました。全科目のテストを私の前で見せたりしてくれました。また、回復してきて、もうすぐ学校に戻るのではないかとと思われるようになる。そうすると、特に目立った特徴が表れてくるのです。1つは、大変よくしゃべる。2人だけならどんな会話をしたっていいわけです。その話が、だんだんお色気のある話になってくるのです。といっても、「この前、イギリスからロックのマドンナが来たでしょう。あの子が、テレビやブランコに乗りましたよね。あの時私はパンツが見えました」。そういう他愛もない話です。また、「この前文化祭があったんで、開成高校へ行ってみました。そしたら、あの高校の男の子たちも大したことはありませんでした」などといったことを次々としゃべって帰っていきます。また別のときには、ものすごく派手な色のセーターを着ていたり、スカートだってびっくりするような色のスカートをはいていたりしておりました。だんだん違ってきたのです。私のほうは、間をもたせなくてはいけませんから、いろいろ勉強しました。「今日のそのスカートいいじゃない、それシブカジ？」なんてね。わかりますか？「渋谷カジジュアル」の略です。一時期そういうファッションが流行りました。それから、「その色派手だね、ベネトンじゃない。」と聞くと、「そうです。」と言

います。「僕はベネトンが好きだけど、色が派手すぎて、われわれの世代にはあわないよね」などというと、すごくノッてくるわけです。要するに、ちょっと色気のある話、それからぐっと派手な服装、これはまさに「回復」の予兆だったのです。あとで教育心理学の同僚から教わりました。みんなこうやって元気になっていく。その生徒は、ついに2学年遅くなりましたけれども無事卒業し、最後は、「私の希望していた大学に進学できました」という年賀状が来て、立教にいた僕のところにおしゃべりに来ました。その次には、「私の希望していた就職先に決まりました。」という報告が来て、交流は終わったのです。

私はあのような子たちを見てきて、不登校というのは挫折の印だという自分の思い込みがいかに間違いだったかとを痛感させられました。挫折ではなく、つまずいたのです。そして起きる力はないのか、そんなことはありません。起きる力は、頑張れば、出てくるのです。当時私が無意識的にやったのは、心理学者の言う「受容」ということだったと思います。

私はまた、不登校への理解がだんだん変わって来るのが分かりました。あの当時、文部省周辺に集められた専門家たちは、「不登校になる児童には一定の性格傾向がある」と言っていました。性格傾向の第一は、第二は、第三は、というように10個あまりも挙げていました。自己中心で、わがままで、というようにいろいろあって、どれかの性格傾向が不登校をもたらししているのだ。まずその性格傾向を直したらよい。例えば、学力に自信のない子には学力をつけさせればよい、というような話だったのです。

ところが私が3年間あの子たちとつき合っている最中に、学者たちは、その性格傾向説は間違いだ、という説に変わりました。子どもたちが不登校になるのは、大人社会に競争があるからである。子どもたちはその競争社会の中で学校へ行くことを強制されている。その結果、学校の競争で折れているのだ、という説がぐんぐん有効になってきました。これは私の経験と非常によく合う説でした。あれほど優秀な子たちが、それぞれに独特な取柄をもっている子たちが、どうして不登校になるのか。「学校化社会」という環境の中に、つまづくための必然的な条件があったのです。

以上は、私の小さな体験と学びです。皆さんにとっても、卒業して現職に就いてからの経験がすごく大事だと思います。みなさんがもし来年以降教職に就かれたようなとき、それ以降の勉強にぜひがんばっていただきたいと思います。

二番目は、先生がた向けのややこしい話になってくるのですけれども、大学や学部は教職志望の学生諸君にどういう力をつけたらいいのでしょうか。教職課程にとってみれば非常に大事なカリキュラム問題です。

大きく言うと、二つの考え方があります。一つはなるべく教育学からちょっと離れたリベラルアーツを中心に勉強をさせた方がいい、という考え方です。もう一つは、具体的に授業をやる力や必要なスキルを中心にカリキュラムをつくるという考え方です。

私は、この二つを両立させることこそが重要だと思っております。

リベラルアーツというのはもともと何だったかという中世のヨーロッパの大学で生まれてきた教養科目の汎称だったと言っていいでしょう。七つの科目がありました。先ず一つは文法、論理学、あるいは弁証法の三つ。これらは全部文科系ですから、文系三科とも言われます。もう一群は算術と幾何、天文学、最後は音楽でした。これは理系の四科と呼ばれることもありました。これらを総称してリベラルアーツというのですけれども、教養と訳すとちょっと語弊があります。それまでにあった神学と医学と法学、この3つの専門学の間を埋めるいわば隙間の学びなのでした。

ただし、これらはそれぞれ役割があったと言われます。文法・弁証法・論理学の文系三科は、教義書を読む力をつけるものだったと言われています。それから、算術、幾何、天文学、音楽、これらは、自然を読む力をつけるものだったそうです。神学・医学・法学では教義書を読んだり自然を読んだりする力はない。算術や天文学や幾何学や音楽を学ぶことではじめて自然を読む力がつく。こういうことだったのです。

リベラルアーツとは本当に困る言葉で、これに合う日本語はないのです。誰も正確な訳をつくれないう。「自由七科」と言ってみたりするのですが、ピタッと合う訳はありません。しかし私は、先にふれた役

割の話からヒントを得ました。現在の日本で教養教育をやるということは、世界を読む力をつけることだと考えればいいのです。世界の中で何が問題か。自分はそれをどう見たらよいか。この力をつけることがこれからの仕事である。大学で教養教育をやることを通じて、その力を育てればいい。そう思いました。

それで、1990年代の末に立教大学で全学共通カリキュラムというものを編成する責任者になった時に、先生方に言いました。「これからつくる全学共通カリキュラムという教養教育では、次の4つのポイントにしていきたいと思います」と。「一つは『環境』です。今現在、人類共通に最も必要なものは第一に環境という視点です。第二に『人権』という視点、それから第三に『生命』という視点。最後は『宇宙』です。この4つを総合教育の4つの核に据えて、科目を編成してみてもいいのでしょうか。考えてみましょう。」という風に提案いたしました。この中で、特に3番目の生命、これは私が言いだしたのではなく、当時の総長だった神学者の先生が「生命の探究ということも大事じゃないですか」と言われたので、なるほどと思い、つけ足したのです。こういう4つの視点をカリキュラム編成に生かすことで、はじめて教養教育の基礎が決まってきたわけです。

私はその時に、これは「リベラルアーツを現代に生かす」方法だと思いました。それを作っていく必要性が我々自身にもあり、また、学生諸君の世界を見る目と方法を育てて行くのが大学の大切な役割であると思いました。

現在の教員養成関係の学部・課程で育てて行くべきものもそれです。教える技術と広く深い教養というのはやっぱり両方ないとだめなのです。どちらかだけでいいと考えるのは短見であり、成り立たない。どちらも不可欠なのです。小さい詩ひとつ、たったひとつの、ほんの何行かの詩を教えるのも、先生方は大変苦勞されることがあります。他方、それを用いて授業をするために何が必要かという、その詩をつくった詩人、つくられた時代、その詩そのものの言葉、これについて全部調べて深く理解しておかないと授業というものにならない。そういう点で小学校の授業ひとつとっても、確かな方法・技の習得と広く深い教養とが必要で

## 子どもたちへの深い信頼

四番目に申し上げたいのは、子どもたちの発想を大切にしながら知の創造に導いて行くような力を、学生の中に育ててください、ということです。

1人のイギリス系の学者の意見を紹介しておきます。創造的な知というのは、現代社会ではどういう風に作られていくのか。こういうテーマの共同研究の結果です。

マイケル・ギボンズという人物ですけれども、彼の言っていることは私には非常に同感できます。彼は、ノーベル賞をとれるような新しい知の発見は、現代においては2つのやりかたでなされるということです。

まず一番目は「専門の知」というべきものです。「専門の中の知」と考えてもいい。例えば、なゼリノゴの実は落ちるのか、というような疑問から生まれたと伝えられるニュートンの万有引力の法則、あれなどはまさに典型的な「専門の知」です。そして今でもオリジナルな知として認められています。

しかしギボンズたちが唱えているもう一つの新しい知は、「専門外在的な知」です。専門外在的というのはどういうことか。例えば地球温暖化というような巨大な問題がある。それはどの学問の専門テーマか。天文学であろうか。それだけではありません。地理学か、それとも気象学か。いろいろ推測されるけれども、いずれの専門学にとっては、外側で起きています。それだけに、一つの専門だけでは解けないという特徴がある。今、我々が直面している新しい問題の大部分は、専門外在的な問題であると言えます。マイケル・ギボンズたちは、現在ないし今後非常に大事なものは、「専門外在的な問い」にきちっと多くの専門を通じて答えていくことだということです。地球温暖化などは、その好例だと思います。

ギボンズたちは、専門内在的な知を使って問題に迫ることを「知の第Ⅰ様式」と呼び、専門外在的な知を使ってのそれを、「知の第Ⅱ様式」と呼んでいます。教育の研究に特に必要なのは、知の第Ⅱ様式です。子どもたちが日常さまざまな問題を起こし、これは何なのか、どこから起きた問題かと悩まされる。それらは全部専門外在的な問題なのです。それに対して我々はどういう風に対応していったらよい

か。その答えもまた、教育学の専門学の中からは出てこない場合が大部分だと思います。

考えてみれば、大学カリキュラムもそのことに配慮しておく必要があります。今この様式による知の創造をやっているのは小中高校生たちです。小学校では生活科、中学校では総合的な学習の時間、あの時に彼らがやっているのは外在的な課題を見付け出して、そして、従来の知を駆使してそれを解いていくという訓練です。その訓練のプロセスをちゃんとわかって、子どもたちは何を問題にしているか、その疑問にアプローチさせるにはどう見守っておけばよいかを、広く見渡さないとはいけません。

私には思い出があります。総合的な学習が始まったころ、あれと類似した活動を先駆的にやっていた学校が全国にたくさんありました。その中から9校を選んで、担当の先生方をお招きし、インタビューをやったのです。長い時間をかけました。

まず現地で授業を見せてもらって、それから東京へ来ていただいて、半日かけて報告を聞く。その後討議をしました。

ある教員養成大学の附属小の先生の体験談が印象に残っています。その学校では、「総合的な学習」を学習指導要領に載る3年前からやっていました。ところが、「3年間やった中の2年間は失敗でした」と言われるのです。なにが失敗でしたかと聞いたら「我々は上からテーマと方法を与えたのです。」と。「よし、今年は校長、『環境』で行きましょう」と誰かが提案したら、「それがいい、では環境に関連する教科は何か。それはまず理科。社会科もちょっとは関係するだろう。家庭科も大きく関係する。でも、国語や算数はあまり関係しないのではないかな」と言っていて、理科と家庭科と社会科の一部、これが協力して「環境」というテーマで総合的な学習の時間を編成してみたそうです。すると、全然子どもがのってこない。どうしたらいいかわからない。先生の中にも張り切っている先生と他人ごとと思っている先生との差異ができてしまった。2年目も、「では違う路線で行こう、外国理解はどうですか、ああいいですね」などと言って走ってみたけれど、今度は理科系の先生は全然のってこない。「いろいろ迷っていたのですが、3年目になって私たちは気がついたのです」とおっしゃるのです。「課題を子どもた

ちに選ばせてみよう」と。

3、4、5、6年生の児童たちが相談した結果、見つけたのは、なんと「蚊」というテーマだったそうです。刺す蚊です。それをテーマにして進めていくということになった。何が始まるのだろうと思っていたら、ある学年は、教室の真ん中に網戸で丸い檻を作って、そこでポーフラを育てはじめた。別のクラスでは、外国の蚊を調べることにしたらしく、中国に蚊はいるだろうか。ヨーロッパに蚊はいるだろうか。こういうことを一生懸命図書館で調べている組もあった。教室の中でポーフラを飼ったクラスは、最後に、檻の中に手を突っ込んで刺させて、「あ〜かゆい、蚊はこうして刺しているのか」などと言って、自分たちで進んで記録を取ったりして、燃えたというのです。「あの年にはじめて私たちは、総合的な学習の時間が成功したと思いました。それは実に3年目でした」と言うのです。

あの話は感動的でした。つまり、「課題とはなにか、というところから子どもたちに考えさせる。そしてそれに迫る方法も子どもたちに考えさせる」。これは、子どもたちへの深い理解と信頼がなければできないことです。そういう力量をあの学校の先生は持っておられたのですね。学生のみなさんにも、得来、そういう力量を持っていただきないと思います。

子どもたちの発想を大切にしながら、知の創造を体験させる、同時に経験を通じて感性を育てる。これらが、教員養成学部の大事な仕事になってくるのではないかと思います。

## 二つの夢

時間が来ましたので、最後に夢を二つ申し上げます。

一つは、教員養成学部の課程に今改革が求められていますけれど、それは日本の教育そのものの変革課題と実は直結しているということです。すなわち、免許状を取るための教員養成のプロセスと、生活科や総合的な学習の時間に繋がるような創造的な教養教育の課程と、この2つをちゃんと両立させていくという課題です。しかも、あの方の教養教育のプロセスを決して軽視しないことが大切です。

これは、今、教員養成の学部や課程だけでなく大学全体が求められている課題にほかなりません。

日本の大学は4年間の間に専門教育をやりすぎる、専門教育はむしろ大学院のほうに移し、学部の段階では、「専門性に立つ教養人」の育成に当たって下さい。あえてそのように唱えたいとは思っています。

教員養成学部や課程は、資格に直結しているために、他学部の先生たちからはなんとなく異質感をもって見られます。ところが異質ではなく、共通した課題を持っていると気付いたときに、実は大学改革への参加の芽があらわれてくるのではないのでしょうか。教育関係の科目は考えてみれば、どれもこれも教養科目なのです。子どもの出てこない教育学はない。人間の出てこない成人教育の科目はない。人間の出てこない教師論はない。教育実践論で教師と子どもの関係を問わないものはない。考えてみると教育関係の学部は、そしてそこで教えている学問は、全部教養の一部だと思って差支えないのです。教育学部は、実は、大学総体の使命の中心に立っていると思ってもいいと思います。

## 生涯にわたる学習と大学

2番目は、皆学び続けるという社会が来るということです。

卒業して学び続けるためには、どうしても再入学をする必要があるのですが、そういう志にこたえるための改革の努力を、大学は続けなければならないと思います。

今日、中部大学の理事長や学長とお会いして、ずいぶんたくさんの再入学の方がいらっしゃると思いました。大変いいことだと思います。立教大学でも、「セカンドステージ大学」という施設をつくって大成功を遂げました。大学は、勉強したいと思っている中高年の方たちがいつでも帰ってこられるような泉になることが重要です。あそこに寄ってちょっと水飲んで行こうかという程度のことで構わない。いつでも帰って来られるような大学になる。これがこれからの大学の非常に重要な使命だと思います。

確かに、少子化が進んでいて、つぶれる大学も出るでしょう。政府はそれを助けずに「つぶれるとこ

ろはどうぞ自己責任で」ということになるかも知れません。しかし、変わらず続く大学もきっとあります。どうやったら続くか。私は、やはり大学をユニバーサル化することが重要ではないかと思っています。

日本の大学にはグローバル化の潮流がちゃんと来てますから、これをもう一歩進めることだと思います。もう一歩進めて、もっと自由な大学にする。いつでも帰ってこられる大学にする。これが大事だと思います。それに成功した時に、大学は生き残れるのではないのでしょうか。再入学受け入れの習慣と制度の準備を進めるというのはそういうことです。教育学者は、その制度に関してお調べになって、大学の中で世論を作っていかれたらどうかというのが私の提案です。

さて最後に、今度の講演を頼まれたことを機会に、私は改めて中央教育審議会が去年の12月に出した答申を読んでみました。これは文部科学大臣の諮問機関です。読み直してみても、「あっいろいろなことが書いてあるな」と思いながらも、今、大学全体は大きな危機に直面しているとあらためて思いました。確かに答申等には、人類は知識基盤社会に移っていること、その中で大学はグローバル化を要求されていること、最後に少子化に直面していること。

この3つが最大の課題であって、これに対応するにはどうしたらよいかがいろいろと書いてあります。

しかし、右の3つは、私に言わせるとそれぞれが違うのです。

「知識基盤社会」というのは、半世紀前から、OECDがずっと言ってきたことで、今改めて叫ばれているだけです。それからグローバル化というのは現実的には、市場の世界化ということ、すなわち世界中にマーケットが広がっているということにはほかなりません。だから、英語をやれと中央審議会と言っているのですが、この主張だけに応じて行っているのでしょうか。他の外国語はどうなるのでしょうか。

最後の少子化。これは、大学の責任で生まれた事態ではありません。大学が責任の取りようのない事態です。ただし、それに直面させられていることは確かなので、何とかしていくためには、さっき申しましたように大学を生涯にわたる学習機関にするという最後の課題に挑むが必要になってきます。そのためにも、ぜひ教員養成学部がお力を添えられるようにお祈りいたします。

考えていたより長くなりました。皆さんよく聞いていただき、ありがとうございました。